

平成30年9月21日(金)

二條新聞合流点より

五人組に告げる

声を大にして言いつ

村のありのままを議論せず村民  
が求める正道を混乱させる議員  
はいらない

一としてから村のホームページで議会の議事録を見ることが可能となった。六月議会では来る村議選を意識したのか、8人の議員が質問している。丁々発止と持論を展開することはよいことだが発言には責任をとるもなう。

今までの政策批判ではなく、今後の弥彦村をもに考えると前置きをしても、財政が厳しいなか相撲関係三百万円の支援縮小とモンゴルとの交流事業に疑問があり、縮小、または撤退するのは問うていた。

弥彦駅前広場の整備が遅れたのは入札不調が続き、年末にようやく業者が決まったが、大雪で工期を延期したことを設計内容も変わらず期限を決めて発注した以上は工事完遂の管理監督責任があると建築施工管理技士が言う。大雪でも自分なら工期を守らせたと読み取れる発言、建設工事請負基準約款を知らないとは言わせない。

新聞によると、九月議会では、弥彦

観光のにぎわいを拠点としてのおもてなし広場構想を、地方創生の「愚策」に飛びついたと批判したのは本多啓三議員。交付を受けた燕市、三条市など、県下19市町を批判したも同じだ。

弥彦駅前広場おもてなし広場神社を含む総合的な観光対策の一環として老朽化した競輪場の改修計画が審議された。女性や家族連れが入りやすく、競輪場以外に活用する場内イベントステージの設置や災害時の避難施設として利用可能な多目的の「親しみやすい競輪場」としてリニューアルし、競輪ファン層の拡大や寛仁親王牌レース再誘致に必要な環境整備も改修の狙いだといふ。資金は積み立てた競輪基金と車券販売から得られる収益を充て、借金をしないといふ。

この計画にまたしても反対したのが反村長派の五人組だ。反対理由は四ヶ月後に行われる村長選挙後の村長にさせるだといふ。

村の根幹は観光と農業と競輪の三本柱だ。持続可能な弥彦競輪のための改修計画に、本多啓三氏らの疑問を解くためわざわざ業者を呼んで説明を受けたが、理解できないと言つより、業者の能力を疑い、新年度予算に計上せよ等と無理矢理正当化した否決意見には説得力がない。

目的は計画阻止ただ一として断ずる。

生々堂々と戦った現村長に敗れ、副村長職を失った逆恨みか、さもなければ村長の繰り出す数々の知恵と行動とその結果に対するねたみか。はたまた背後にいる司令塔の操りが。

五人組を強く非難する。税収がじり貧の村が競輪で収益を上げて一般会計に繰り入れるとした借金なしの改修計画のその先には村民が待っている。言葉を変えれば村民の幸せのための計画に反対したのだ。これは村民に対する重大な裏切り行為で議員の誇りも使命感も感じられず、私利私欲のためなら村民を裏切るごとしか頭にならない無能議員だと世間にさらしただけではないか。

五人組の首領は本多啓三。副村長のいない間の総務課長五年間、副村長四年の九年にわたり村政をあらゆる、臭いものに蓋をした経歴の議員だからこそ反村民の行為を批判するのだ。重要な案件を主導し否決したのはいれど何回目だというのが。

五人組に告げる。自慢できる特産品もなく財政基盤が脆弱なわが村に、救いを求めるところが競輪事業であり、競輪環境を改善して収益を増やし一般会計に繰り入れることではなか。村の逼迫した財政状況も老朽化した競輪場施設やその改修の必要性も百も承知しているはず。声を大にして言おう。村の有りようを議論せず村民が求める正道を混乱させる議論はごうございませう。

さて、乱れた心を穏やかにして続

けよう。議事録には村長の日常活動の一部を議会に報告した行政報告という項がある。

就任以来の様子は村外の団体や自治関係。上級庁訪問などの諸活動が載っていた。日常業務をこなしながらこんな忙いのかと思うほど多忙な一端を知ることができた。首長もトップセールスマンと言われて久しい。小林村長は村のさらなる発展のため東奔西走し奮闘する姿が浮かんでくる。

村民の意見を聞かず一夜にして合併を拒否し、財政的に問題がないとして自立の道を選んだ前村長の行政報告も見た。県関係者の当時の話だが、週末行事には多忙を理由に代理出席が多かったという。競輪関係の出張が多いと近所の人から聞いて信じていたが本当だったのだろうか。

村外からみた弥彦村は 顔の見えない村だったのだろう。

啓三議員の顔色をうかがい、追従する議員 本多隆峰、赤川幸子、田中満男、小熊正各議員に問う。自分の意思で行動したと断言できますか。本多啓三のフィクサーは誰ですか。金の魔力を問われた許永中は 考えを変え出来ないことをする人に豹変させる「と語っていた。村の予算はすべて税金です。

(金がほしい弥彦村民)